



No.69 2004.5
(株)よかネット

NETWORK

作り続け、関わり続け、自分たちの公園に	2
公園のシンボルをみんなで作ろう～花壇づくり編～	
高齢者の暮らしをどう支えるか	4
～介護保険適正化事業報告～	
見・聞・食	
松江市の観光産業の取り組みは、	7
一粒で双方が二度ずつおいしいスタイル	
ゆったり、のんびり筑後川・有明海遊覧ツアー	10
出雲大社・宗像大社～	
もっと観光で稼ぐようなことができないか	13
食の開発者と消費者の接点を求めて	
～食と健康を考えるフォーラム～	15
既存の施設を活用したユニットケアと	
地域のボランティアに支えられるアウトドイサービス	
～大分県中津市「いづみの園」～	17
近況	
車イスで山登り。行けるところまで行ってみよう！	19
新人紹介	21
本・BOOKS	
あるのかないのか？日本人の創造性／高峰譲吉の生涯	22
次の生き方	23
お知らせ	24



①

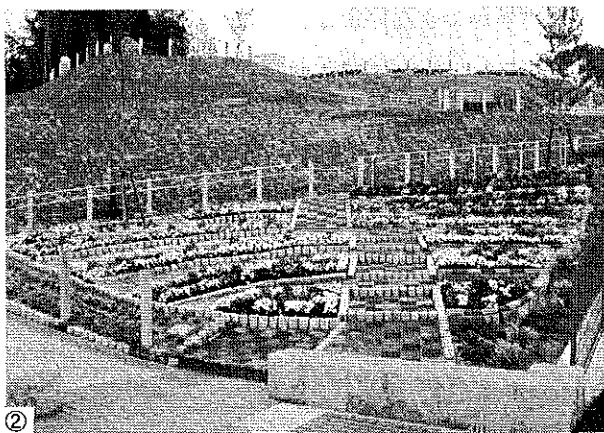
●まちのシンボルは、
住民と行政の協働のシンボル

住民参加による公園のシンボルづくりとして、花壇づくりと日時計の壁画づくりを行いました。1ヶ月半の作業期間に約200人の住民が関わりました。
(本文2ページ)

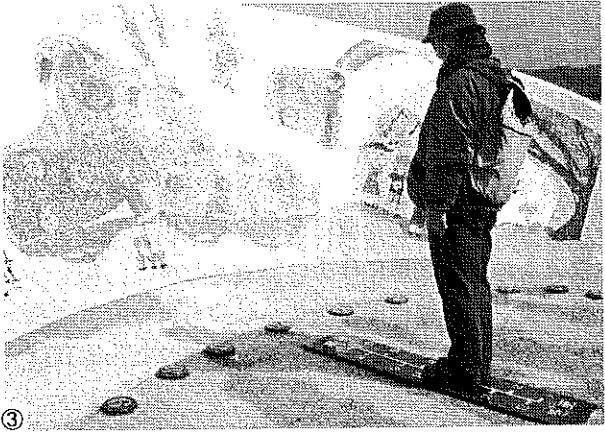
①花植え作業には子どもから高齢者まで参加しました。

②かげぼうし日時計。その月の位置に立って11時すぎであることを確認。

③できあがった花壇の一つ。国道から見える、まちのシンボルです。



②



③

作り続け、関わり続け、自分たちの公園に 公園のシンボルをみんなでつくろう ~花壇づくり編~

伊藤 聰

福岡県の旧産炭地域である稲築町で、稲築公園拡張整備が行われた。その一画に、住民参加によるシンボルづくりのゾーンが設けられ、日時計と花壇をつくることになった。平成15年の春、住民参加の事務局グループとして、住民と町職員合わせて28人が集まり、「元気にさかせ隊」が結成された。前回はかげぼうし日時計のモザイクタイル壁画づくりの報告でしたが、今回は花壇づくりの報告をしたい。

●いつまでも関わっていくための花壇

日時計は形として長く残っていくものを作ろうと考えたのに対し、いつまでも作り続けていくもの、関わり続けていくものとして花壇を作ることにした。

花壇になる場所は、北向きの斜面であるが、国道201号に面したいわば公園の顔となる位置。高低差は約15mあり、そこを200m程のスロープで上る。一番下の公園の入り口付近からスロープ途中の所々にかけて、全部で6ヶ所花壇ができることになった。花壇の面積は、狭いもので約25m²、広いものでは約80m²、6つ合わせると約330m²になる。結構な面積だ。予算は、宝くじの助成金が使えることになった。

元気にさかせ隊の会議で、6つの花壇のひとつずつ、コンセプトを考えていった。それを基に、アドバイザーとして入っている造園の専門家にイメージを描いてもらった。

●山上憶良にちなんだ“万葉花壇”も

一番下のスロープ脇の花壇は、車椅子でも寄りつけるということで、車椅子でも楽しめる腰の高さの花壇BOXを配置した「ハーブの小径」に、下から2番目の斜面の花壇は、高低差を生かした段々花壇に、斜面の中腹にある3番目の花壇は、休憩もできる半円形のレンガのベンチを配した花壇にした。

稲築町は、山上憶良が「子らを思う歌」などの稲築3部作と呼ばれる和歌を詠んだ地でもある。そこで、4番目の花壇は、万葉集に出てくる花木などを植えて和風に仕上げる万葉花壇とした。

5番目の花壇は面積が広く眺めも良いので、ちょっと遊べるスペースとベンチを兼ねた花壇BO

Xを配した花壇に、6番目つまり一番上の花壇は、小さいけれどもしやれたガーデニング風の花壇にした。

●花壇の形ができるまでが大変

作業のスケジュールを組む段階で、同時進行中の公園工事の状況と年度末の完了報告との関係で、1ヶ月半しか現場での花壇づくりの期間がないことが分かった。1ヶ月半と言ってもボランティアの作業だから、ほとんど週末しかまとまった作業日はとれない。しかも1月中旬から2月末という、最も寒い時期。植えられる花の苗があるのかどうかさえあやしい。公園がオープンとなる4月には、やっぱり花が咲いていないと寂しい。一面土だけ見えて、「種は蒔いているんですけど……」、というのもさえない。

今回の花壇づくりは、単に花を植えるのではない。何もない所に、花壇の形を作ることから始めるのである。

スケールを測りながら花壇の形に杭を打って、水糸を張って、水準器で水平を出して、花壇の縁や通路の部分を掘り返し、基礎を作るために砂利を敷いて、さらに砂やモルタルを敷いて、その上にレンガや縁石を並べる。通路になるレンガはデコボコができないように、縁石は土が流れ出ないように、ひとつひとつ並べていく。そして、花を植えるところ以外の部分ができあがり、残ったところを掘り返して、肥料を混ぜ、ようやく花を植えられる状態になる。花植え作業は、全体からみれば最後の最後、という感じだ。

●素人ボランティアで、予想外の作業が続出

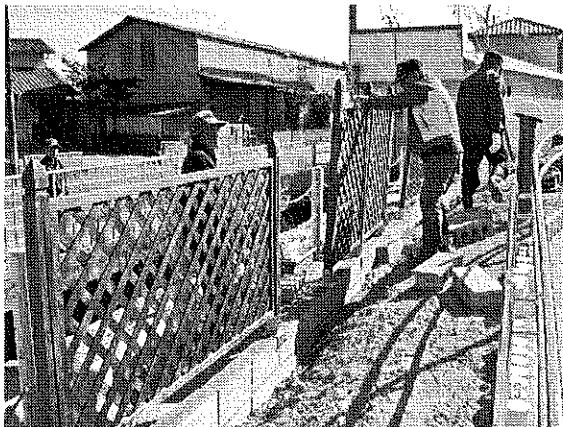
1月中旬の最初の作業説明会は天気も良く、幸先良いスタートだったが、次の週末は大雪で中止。



花壇づくり作業の手順を現場で説明



通路部分にはアンティーク調のレンガを敷いた



ツルバラをはわせる格子トレリスも立てた

早速、予備日を使い果たした。

作業日は週末だけではなく、平日も水曜日だけ入れることにした。仕事を引退している方々は、週末は行事が多くて忙しく、平日の方が空いているということが分かったからだ。作業日を曜日で固定したのは、資材や道具を現場に置けず毎回運ばなければならなかつたことと、作業日にイベント保険を掛ける関係からである。

作業するメンバーは、ちょっとした経験者が何人かいいるだけで、ほとんどは素人集団である。斜面の上から下まで6つの花壇に分かれ、指示もアドバイスも隅々まで行き渡らない。指示している我々でさえ現場のプロではない。購入する花の量は、図面と現場の誤差が大きく、なかなか確定できない。基礎部分は砂利と砂の厚みが自分量だったので、砂は不足、砂利は大量に余り、役場の担当者は毎週のようにホームセンターに砂利を持っていっては砂と交換。基準とするレベルが設計より10cmほど高く、全体的に土が不足してあちこちからかき集める、など想定外の作業が続出した。

花の種類や植え方は、ガーデニングの専門家に絵を描いてもらい、それに沿って苗の量を割り出して購入した。さすがに、花の種類を良く知っている人が選定すれば、まだ寒さの残る3月始めでも、かなりの彩りの花壇になる。パンジー、ビオラなどが彩りの中心だが、後々植え替え作業が大変にならないよう、スイセン、ムスカリ、バーベナなどの球根ものや多年草、立体感を出すための低木なども多く選んだ。

●花植え作業はあつという間。そして完成祝賀会

花壇の形作りは、かなり男性中心で作業が進んだが、花植え作業は誰でも参加できるということ

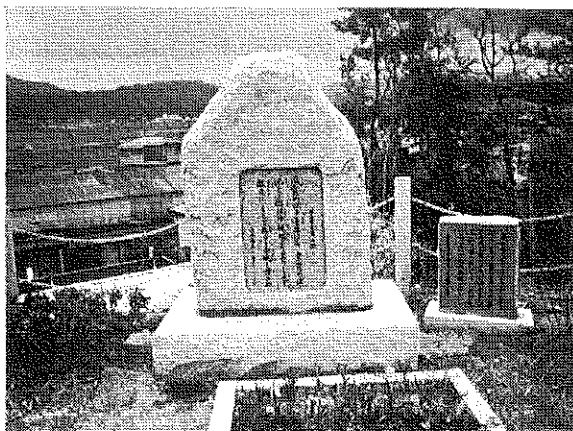
でイベント的に行った。2月の最後の週末、女性、高齢者、障害者、子どもなども参加した。

色つきで描かれた花壇のイメージ図（かなり詳細）に従って、ビニールポットに入った苗を花壇に並べ、位置を確認。花によっては、結構余ったり足りなかつたりしたので、あとは現場合わせで詰め込んだ。一通り位置合わせができるから、一斉に苗をその場所に植えていった。万葉花壇では、造園業者にも手伝ってもらい、枝垂れ梅や山桜等も植えた。それまでの花壇の形作りからすれば、花植え作業はあつという間に完成した。花壇づくりの参加者は、ほとんど毎回来た人、1回だけ來た人々だが、元気にさかせ隊のメンバーも含め、グループ、個人合わせて約130人となっていた。日時計の壁画づくりの参加人数を含めると、200人以上になる。

計画の時点では、花壇が広かつたため、全部できなかつたら、残りは菜の花かコスモスのような種を蒔いておくだけのものにするか、低木の植え込みにしてしまうか、あるいは来年続きをやるか、というようなことも考えてはいたが、結局作って



完成祝賀会では豚汁とおでんが振る舞われた



山上愷良の万葉歌碑が住民の寄贈で設置された

しまった。少しきついスケジュールを組んでいたが、人数も集まり、熱心な人やまめな人がいて、その通りに進んでいった。

隣の旧稲築公園の桜も咲き始めた3月の最後の日曜日には、花壇と日時計の完成祝賀会を行った。公園に大鍋を持ち込んで、豚汁とおでんを作つて振る舞つた。

●これからは維持・管理活動を継続

花壇は一応完成したが、本当の完成ではない。そもそも作り続けていくことを目的としたからだ。ひとつは継続して維持・管理していくこと。数日おきに水やりが必要だし、花が咲いた後の花殻取り、雑草取り、木の枝切り、芝刈り、ゴミ拾い、あるいは犬のウンチの始末や、落書き、破壊、盗難の心配もしないといけない。年に何回かは花の植え替えをすることになり、その計画づくりも必要だ。

これらを、住民と行政の協働でやっていこうと決意したから、活動に意味がある。月に1回、第一日曜日の午前中は管理作業の日として、定期的に集まることにした。

また、今はできていないけれど、木のベンチも欲しいし、東屋も欲しいという声がある。木のベンチには、公園整備時に切った樺の木などの丸太が一部取つてある。参加者の記念オブジェや、タイムカプセルを埋めようか、という話も盛り上がつている。

●「自分たちの公園だ」という気持ちの表れ

先日は早速、参加者の有志によって、万葉花壇に大きく立派な万葉歌碑が2つも持ち込まれた。役場の人も驚いていたが、斜面の中腹の花壇に、クレーンで運び込んだようだ。

公共施設でどこまでやるか、という問題は一方であるが、住民が「自分たちの公園だ」と思い、もっといい公園にしたい、花が枯れたら自分たちの責任だ、と感じていることは間違いない。「公共施設はみんなのもの」の裏返しが「誰のものにもなっていない」となるより余程まだ。

この町の住民は行政への依存体質が強い、要求ばかりだ、などと言われていたが、決してそんなことはない。自分たちの力でどうにかしよう、行政も一緒にになって何かしよう、という機会がなかつただけだ。あるいは、声の大きな人の陰でこのような人たちが目立たなかったに過ぎない。

まちづくりの気持ちを、形にすることができた。公園のシンボルというだけではなく、住民と行政の協働のシンボルである。参加者には、たくさんの人を連れてきて、自慢話をして欲しいし、仲間を増やして欲しい。そして今度は、家や地域でもそのノウハウが環境づくりの役に立つことだろう。

(いとう さとし)

高齢者の暮らしをどう支えるか

—介護保険適正化事業報告—

愛甲 美帆

67号でもお話をしたが、昨年度当社では福岡市老人福祉施設協議会（以下老施協）が行った介護費用適正化事業の調査の一部をお手伝いさせていただいた。

平成14年度「介護保険事業状況報告（年報）」（厚生労働省老健局）によると、全国の介護保険受給者3,048万人のうち、在宅サービス利用者が

約7割。施設サービス利用者が約3割である。一方介護付費は、在宅サービスが約4割、施設サービスが約6割となっており、受給者数と給付費の割合は矛盾した結果となっている。このようのことから、全国自治体や老人福祉施設協議会での実態や今後の方向を検討するため調査が実施された。

●福岡市老施協の取り組み

福岡市老施協では、「在宅生活が困難」な入所者に対し「施設内で良質な介護を提供する」ということに重点をおき「家庭との繋がりを大切にする」ということに目を向けていなかった反省があった。そこで「在宅復帰へ向けたケアプランを策定・実施し、在宅復帰を可能にする入所者のニーズや外泊を支援するサービス構築の検証」「個別ケアや環境整備など入所者の自立支援に向けた環境整備とサービスの質の向上」を目的に、3つの取り組みが行われた。①特別養護老人ホーム入所者に対する外泊に関するアンケートの実施、②施設入所者、ショートステイ長期利用者の在宅復帰ケアプランモデル事業、③各施設ごとにテーマを設定して取り組む個別ケア研究である。

この取り組みの報告と「高齢者の暮らしと地域」について感じたことをまとめたい。

●入所者アンケート結果では、外泊の有無について 外泊「あり」3割、「なし」が7割

アンケートは、特別養護老人ホーム入所者の家族を対象に実施した。1,443人から回答を得て、回収率は69.6%であった。

- ・外泊「あり」のうち、その半数が頻度は1年に2～3回程度、期間は1泊2日程度、益々正月に帰るという現状である。中には、月1回程度帰る人もいた。
- ・外泊して良かったことは、「親子・兄弟等の家族間の交流が深まった」「外泊して入所者本人が喜んだ」の割合が高かった。一方、「子としては安らぐが本人は泊まりたがらない」「介護で家庭の雰囲気が悪くなつた」という意見もあった。
- ・外泊して困ったことは、「高齢者介護が思った以上に大変だった」「住宅の環境が良くなかった」など介護、住宅環境、本人の状態、緊急対応について挙がっていた。
- ・外泊の機会を増やすために必要なことについて

「他の親族の援助があれば」「車椅子による送迎など、移送サービスがあれば」「体調変化の際の十分な配慮」「ホームヘルパー派遣など、在宅サービスが利用できれば」が挙がっている。・外泊「なし」について、外泊が困難な理由は「自宅での介護に自信がない」「介護者が高齢病弱である」「外泊させる意味がない」の割合が高かった。

自由記入欄には、「夜間の介護が大変」「家中を動き周り一時も目が離せない」「いかなる理由があつても無理」など外泊が困難な理由が切々と書いてあり、本人の状況、家族の状況など外泊の難しさが伝わってきた。

調査では、さらに月1～2回以上外泊をされている方にヒアリングを実施した。その結果当初「介護度が軽い方が帰っているのだろう」という予想は外れ、その9割が「介護度3以上」の方で、家族の努力と想いで外泊が行われている実態がわかつた。

●入所者本人の希望と家族の思いをどう支えるか

実際に入所者やショートステイ長期外泊者支援ケアプランをたて、1泊2日や2泊3日の外泊を行う試みを7施設が行った。施設入所者が在宅サービスを利用する際は全額自己負担となるが、今回は、外泊する際の在宅サービス費用はこの事業で負担された。

この取り組みで「在宅復帰をめざした排泄ケアの取り組み」「施設の中でみられた異食や放尿行為が自宅では一切なかったこと」「本人の帰りたいという強い意志に対して不安だった家族が、在宅サービスをうまく利用していく中で生活スタイルをつくっていった」などの事例が挙がった。

ケアプランをたて実行していく中で、本人の気持ちを引き出し、それを実現するためにどのようなケアを行ったらよいか、周囲をどのように巻き込んでいったら良いかということが重要なポイントのようだった。

●ニーズがあれば外泊を支援していく

外泊に関するアンケート、外泊支援ケアプランの取り組みを通してワーキングチームでは、以下のようにまとめた。「施設に入所される方は、本人の心身の状態や家族が高齢化、仕事の都合などの事情で介護が困難なため入所される。必ずしも“外泊＝入所者の生活の質の向上”につながるわ

けではない。しかし、介護保険制度のなかで、在宅ケアを是とし、施設ケアを否とする傾向があるよう思うのは、施設が生活の場と捉えられていないからではないか。施設では、入所し一度も自宅や地域に帰ることなく、外出らしい外出をすることがない生活を送ることもある。これからは、入所される方のこれまでの繋がりをその人の“財産”として受けとめ、外出・外泊・地域の方との交流をもつなど『開かれた施設としての役割』を果たしていきたい。これは施設だけではできない。施設は外泊のニーズがあればケアプランに取り入れることともに、介護保険サービスやボランティアなどのインフォーマルサービスを利用しながら協働で支えていくシステムの構築が必要である。」

これに対し、アドバイザーの城西国際大学服部万里子先生や西日本短期大学黒木邦彦先生からは今後の方向性として

- ・この調査を事業化につなげる
- ・外泊先の導入可能サービスの検討。サービス資源をどう活用するかというノウハウができれば、外泊時や在宅復帰に向けても有効。（サービス例：買い物に行くなど少しの間様子をみてくれるボランティア、外出介助、社協の福祉用具の貸し出し、外泊中の食事の宅配など）
- ・地域の主治医との連携をどうしていくか
- ・外泊時に介護保険サービスが一部利用できるよう市町村への働きかけ

という意見をいただいた。

●家族からの発言も出た事業報告会

今回の事業で驚いたことは、ワーキングメンバーの熱心さである。せっかく事業を行うならば、全施設のレベルが上がらなくては意味がないということで、外泊支援ケアプラン実施以外の施設は、各自テーマを決めて個別ケアの研究を行いレポートを提出した（本年度テーマ別に勉強会が開かれるそうだ）。

7月から約半年をかけてこの3つの取り組みが行われ、2月末に報告会が行われた。家族にもぜひ聞いて欲しいということから、施設職員だけでなく、入所されている方の家族にも案内をされた。

報告が終わった後、家族の方が手を挙げられ「親が施設に丸5年お世話になっているが、毎日姉妹が交代で食事介助を行っている。車椅子だが、

北海道旅行にも行くことができた。施設に通って思うのは、面会に来られない家族が多いことである。日頃の施設のこのような取り組みをもっと家族にアピールし、行政や施設だけでなく家族も巻き込んでいって欲しいと思う」と話され、私は今回の取り組みの大きさを改めて感じた。

●「地域ケアフォーラム」に参加し、改めて地域で支えるということを考える

この福岡市老施協の取り組みは、3月末に福岡市の主催で開催された「フォーラム・その先の地域ケアへ！～在宅・施設の垣根を越えて地域ケアで支えるしくみづくり～」でも発表された。

基調講演では、痴呆のお年寄りの徘徊死の問題が取り上げられ、改めて地域でお年寄りが安心して暮らすために見守りの体制が必要だと実感した。

パネルディスカッションでは、「宅老所」「施設（福岡市老施協）」「商店街」「ボランティア団体」の代表の方がそれぞれの立場から高齢者を地域で支えるということについて意見が述べられた。

●隣の活動を知り、これから取り組みに活かす それぞれの活動を聞くと、身近に自分達の活動

- ・「宅老所」…住み慣れた地域のケアハウスに住むAさんの事例を紹介。家族、宅老所、NPO法人、公民館、病院が連携し、Aさんの生活に必要なサービスが受けられた。地域で皆でやりましょうといつても難しい。当事者に係わる人達が協力しその都度問題を解決しては解散する『結集して解散』の蓄積がネットワークとなって安心を創っていくのではないか。
- ・「老施協」…施設から自宅に外泊をされた方の事例。外泊を進めていくには地域の病院やボランティアなどの連携が必要である。今後は地域に開かれた施設としていきたい。
- ・「商店街」…高齢化率が高い街にある商店街なので高齢者を大事にしようと各店舗には休憩スペースを設置、宅配サービスやNPO法人と連携した高齢者のためのパソコン教室を行っている。
- ・「ボランティア団体」…“できることをできるとき”の精神で、公的支援の届かない生活面の援助や心の交流を目的とした活動を紹介。痴呆の奥さんの見守りをしたことで、数年ぶりに選挙の投票に行けた旦那さんの例。高齢の一人暮らしの方が骨折して入院し、退院後10日間だけの援助をした例。活動の中から、高齢者は住み慣れた地域で過ごしたいという思いがあることを実感している。

でこんな取り組みや活動があればと思っていたことやそのヒントがあるという発見があった。事例発表後、パネリストからは「施設が今何を考えているかよく分かった」「入所の中にはちょっとした援助があれば外泊が可能になる。連携していくたい」「在宅・施設の垣根を取つ払い連携する同時に、地域の隣近所のネットワークを大事にしたい。」という意見が出て、それぞれの立場から地域で暮らしていくということに参画していくとまとめられた。

●はじめの一歩

自分の将来を考えた時、年をとっても住み慣れた家と地域で、好きなように過ごしたい。家で暮らすことは難しくなってもどこかでこれまでの暮

らしと繋がっていきたいと思う。高齢者介護研究会報告書「2015年高齢者介護」では、生活の継続性を維持する介護サービス体系がうたわれている。施設、在宅に関わらず、高齢者の生活や暮らしを支えるという考え方のもと、ちょっとした見守りや外出の援助など介護保険制度だけではまかなえきれない部分も含めてどうつないでいくか。宅老所代表の方の「結集して解散」というのは1つのキーワードかもしれない。

老施協の方と勉強会をはじめようかという話も出ている。まずは、施設、NPO法人、ボランティア団体など地域資源の情報を収集し発信していくことから一步進めないかと思っている。

(あいこうみほ)

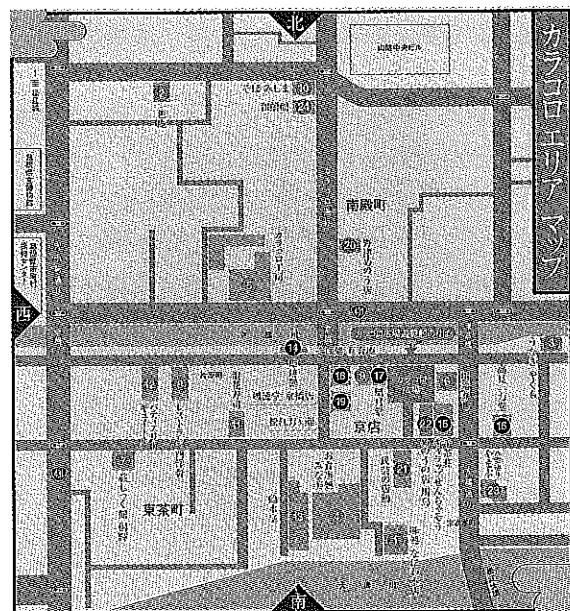
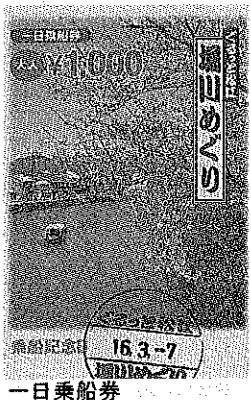
松江市の観光産業の取り組みは 一粒で双方が二度ずつおいしいスタイル 糸乗 貞喜

●堀川遊覧船に乗っただけで、「松江市の観光は少し違うな」と思った

遊覧船に乗った日は大雪だったので、雲が顔に当たってつめたかったが（屋根があつても舟が進むので入ってくる）、炬燵付きだったのでそれほど寒くはなかった。感心したのは、乗り降りは自由（発着場）で、一日中乗っていていいのである。乗降船場の近くには、公共のキモ入りでつくられた核となる観光施設がある。その周辺には民間の小さな飲食店や土産品店が、ぶら下がっている。

我々来訪者は気に入った発着場で降りて、例えば小泉八雲記念館（公設）に入り、ついでに周辺の小泉八雲旧居、田部美術館、武家屋敷などに入り、近所の土産物屋をひやかしたり、地ビール館に入ったりすればいい。そのあとで又乗船に戻って、炬燵付きの船に乗れる。

カラコロ広場というところでも同じ仕組みで、旧日銀の建物を活用して増築した「カラコロ工



カラコロ広場に飲食店・土産物店がぶら下がっている「房」がこのゾーンの核店舗となっており、その周辺に20数店舗が営業している。もう一ヶ所の発着場では、県と市の「島根ふるさと館」という物産センターが、多くの地元商店を入れて営業している。

この遊覧船は、千円払うと堀川をめぐる遊覧を一日中でも楽しめて（私と乗り合わせた中年の男女ペアは、「炬燵もあるし、もう一回まわろうかな」などといっていた）、観光地めぐりの足になり、土産品買い物の足ともなる。一方地元商売人の立場から見ると、客を連れて来てくれる動線（交通インフラストラクチャー）である。発着場近くにある公的施設がマグネットの役割を果たし



カラコロ広場日銀ビル内レストラン

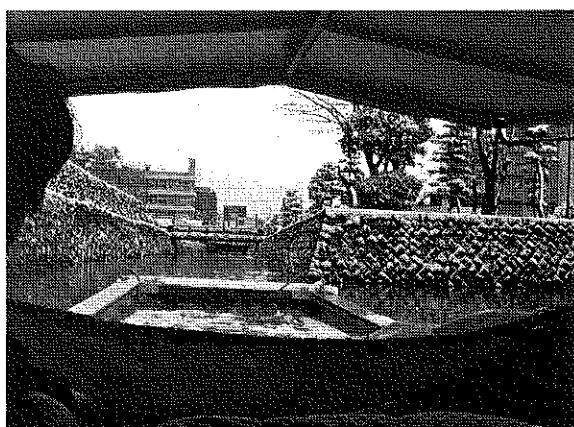
てもいる。

「一粒で二度」ではなく、客の側で「3~4度」、地域産業の立場からも「2~3度」おいしい“地域づくり”になっている。

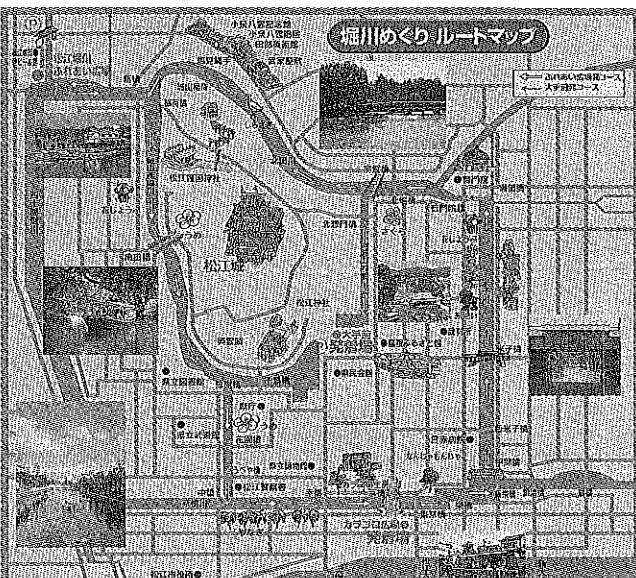
●堀川から見る風景と船のつくりには頭が下がる 思いだった

市街地の遊覧船は、どこにいっても橋の下を通過するための問題が出てくる。松江もはじめは屋根なしのもので、夏は暑いし、山陰は雨も多いので問題があったが、橋の下で通りにくいところもあるので我慢していた。しかし、今では屋根つきになっていて、雨や雪、日差しにも楽になっている。屋根が橋ゲタに当たるという問題はあるが、屋形を支える支柱を斜めにたおすことで切り抜けている。橋ゲタの低い橋に差し掛かると船頭さんのかけ声で乗客が頭をかがめ、屋根が下がってきて通り抜けるという仕組みになっている。乗客は頭を下げざるを得ないのである。

一見窮屈な船のようだが、橋の下をとおるということからすると避けられないことである。私自身は頭を下げさせられながら、この方が安全だと思っていた。乗客がうつかり頭を上げて大怪我を



普段はこんな屋形船だが……



堀川遊覧船ルートマップ

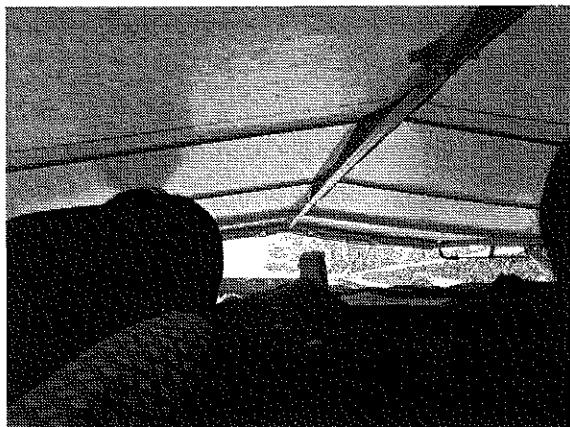
するという事故を防いでいるように思えるのである。

●もうひとつの観光インフラは「ぐるっと松江レ イクライン」というバスシステム

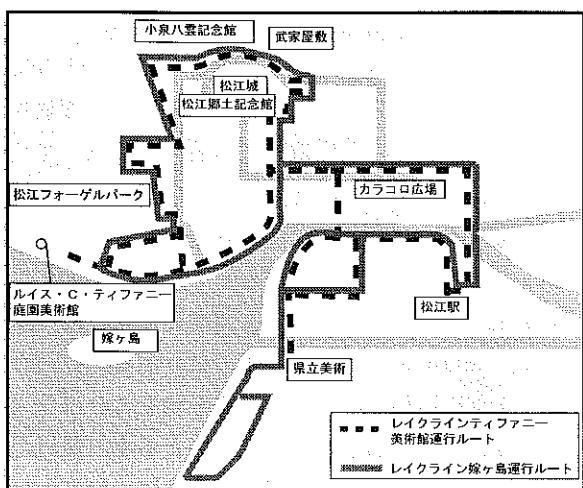
城をめぐる堀川から離れたところの観光動線はバスシステムができていた。松江駅から堀川めぐりの発着場、市街地にあるお城・寺・駐車場など郊外の観光施設を結んで走っている。朝の10時前から夕方の6時頃まで26便のバスがあるので、ほとんど待ち時間を気にせずに寺に入ったり、買い物したりできる。パークアンドライド指定駐車場が三ヵ所あり、バスで回れば駐車場の心配をせずにゆっくり観光できる。

●公民協力の観光施設の建物や運営に工夫が見られる

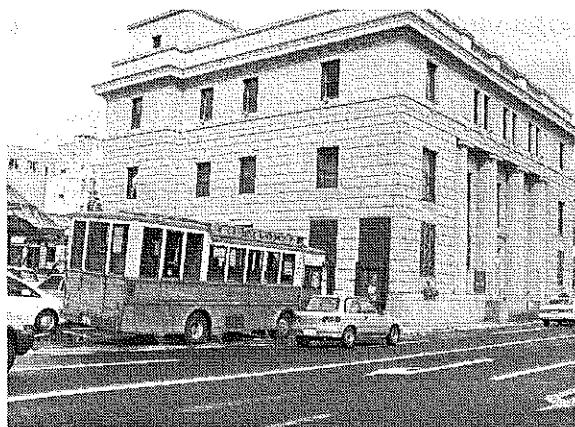
「松江フォーゲルパーク」というところが宍道湖北岸にある。何をしているところかわからないが、



橋の手前では屋根が下がってくるので、頭が下がる



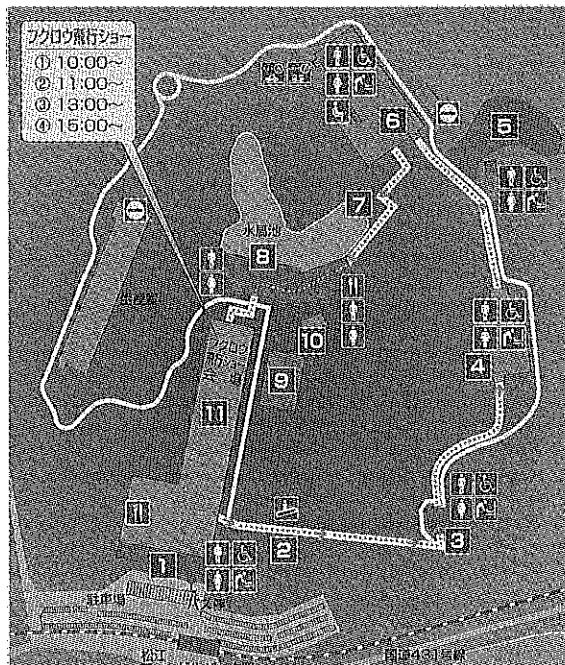
ぐるっと松江バス運行ルート



ぐるっと松江バスと日銀ビル

立派なパンフレットがあるので行ってみた。私たちが行ったときには3月の大雪だったので、閑古鳥が鳴いているだろうからやめようかとも思ったが、ひょっとして周辺部に施設をつくって農村地域などへも雇用を導入しようという算段かもしれないと思って見にいった。行ってみるとこの大雪の中でも観光バスがとまっていて、相当数の中高齢の団体が来ていた。行政がやる仕事でこんなはずはないんだがと思って尋ねたら、「公民近接立地の密接分離経営」の仕組みになっていた。エントランスと長屋門・フクロウセンターはひとつだが、入場料を払って入るとセンターhausという花壇とフクロウショーの巨大な温室がある。団体の人たちがフクロウショーを見たり、写真を撮ったりしていた。フクロウという夜行性の猛禽類が若い娘さんの手に泊まったり輪くぐりをしたりする。

ベゴニア1,500品種などが年中温室の中で満開になっていて、極めて華やかであり、その一隅でフクロウショーが行われているので、観客は巨大温室を全部回って花を見て、フクロウの演技を樂



フォーゲルパーク見取り図



しむことになっている。この巨大温室とは別に長屋門のエントランスを入ったところから右手へ出していくと、花壇や水鳥池などの巨大回遊コースになる。この回遊部分が市設・市営で、先ほどの巨大温室部分は民設・民営になっている。

フォーゲルパークからホテルに帰つて、なんとなくフロントで話を聞いていたら、「市長が前の神戸市の助役さんで、アイディアマンだといわれていました。その市長は亡くなられて、今の市長ではないのですが……」という話が出てきた。

土・日のみの堀川遊覧船見学のつもりで出かけたのだが、ここまで話を聞くと市役所に行かないわけにいかず、月曜の午前中に少しの時間を割いて飛び込みで市役所の観光課にいった。

フォーゲルパークの経営の仕組みを聞いたのはここである。くわしくは聞いていないが、私の推察によると、市が建設運営している部分（51億）

は「都市公園」ということであったから、補助金をもらっているにちがいない。民の建設運営部分（ベゴニアなどの花壇とフクロウの公園（15億））と直結してうまく経営しているように思えた（新聞によると、市の部分でトラブルが起こっているとも書かれていた）。

●小泉八雲と松江

30余年前に松江の街を歩いたことがある。それは「旅館団地」ができていると聞いて、どんなものなのか気になって、仕事で隠岐の国へ行った途次に寄ったものである。

そのとき街を歩いていて、道を尋ねたりすると「ヘルンさんの家はあっちで……」といって、つい昨日まで生きていた人のような語り口で説明してくれる中高齢の女性2～3人に出会った。どの方も同じような雰囲気で、「小泉八雲」がこの国で大切にされていることがわかった。

今回の印象は“大切”を通り越していた。お菓子や店名などに「八雲」が氾濫していた。これは地名からとったのでラフカディオ・ヘルン（小泉

八雲）さんとは関係ないということかもしれないが、私には“ヘルン”さんに事寄せているように思えた。「これじゃヘルンさんが肩こりや腰痛をおこすぞ。松江の人は電動按摩機ぐらい贈っているのかな」などと思った。

小泉八雲はたしかに松江が好きだったことは、彼の文章からよくわかる。しかし、彼は1890年に来日し、1904年に亡くなるまでの間に松江にいたのは、1890年8月から1891年の11月までのたったの1年余りしかない。このような縁をこれほどよく活用している都市は他にはないだろう（最近尼崎市が近松門左衛門を活用している）。松江という都市は、おとなしそうで、やさしそうで人使いの荒い街なのだろう。これはほめられる話で、私もそう思っている。

以上、ほんの1日半立ち寄っただけの感想である。この街は「観光地」のつくり方について、かなり面白いので、続編を書きたいと思う。

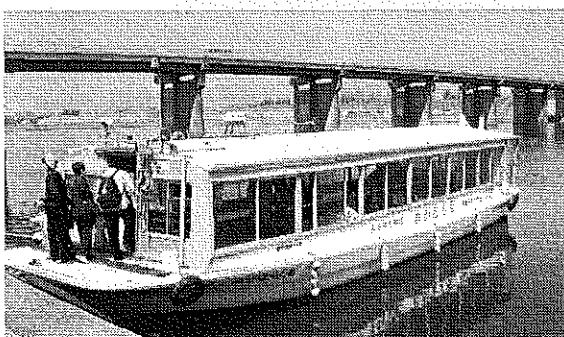
(いとのり さだよし)

ゆったり、のんびり筑後川・有明海遊覧ツアー

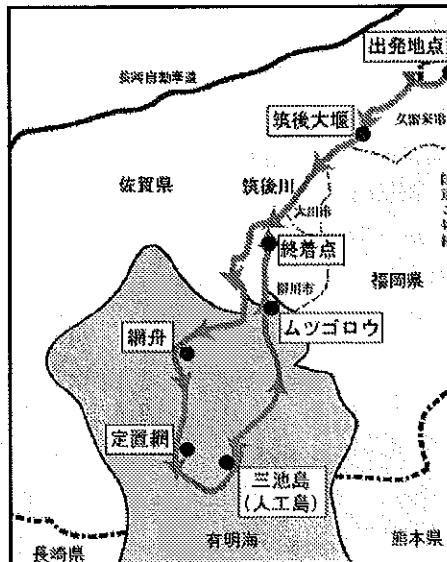
山田 龍雄

今、私の手元に2003年10月26日（日曜日）付けの西日本新聞の新九州紀行「美林、家具産地を育てたイカダ流し」という半面記事がある。この記事の上段部分に日田市の三隈川をゆったりと流れているイカダ9艘ののどかな風景写真が掲載されている。時期は1951年である。

筑後川でのイカダ流しの記録は、江戸中期天保年間（1681～1683年）の古文書に記録が残っているそうだ。その後、大川市での木工産業の発達とともに、イカダ流しは筑後川の普通の風景になっていたと思われる。ちなみに日田市から大川まで約65kmを約2日がかりで木材を運んでいたという。しかし、陸路が発達したこと、ダム建設によって連続した河川運行が不可能になったことから、昭和28年に約300年続いたイカダ流しは姿を消すことになる。また、筑後川では、現在ほど橋が架かっていなかった時代には、「渡し船」が川岸通



船頭の岡村さん自ら設計した屋形船に乗り込む



今回の遊覧コース



筑後大堰の閘門では、約30トンの扉が開く様子を見ることができる

しの人の行き来をつなぐ交通手段として機能していたが、これも昭和52年頃に廃止になっている。

今では、筑後川は生活用水、アユやエツなどの漁業、河川敷での散策やゴルフなどのレクリエーションとして利用されているものの、“舟運”としての利用は、下流域での5月～6月頃のエツ舟以外は、すっかり忘れ去られている。現在、久留米市では筑後川の“舟運”としての役割を見直し、その事業性を検討しており、その“舟運”的ひとつとして筑後川遊覧の商品企画と事業性について考えている。当社では、その事業可能性のお手伝いをしており、実際に体験しないことには、筑後川遊覧の楽しさはわからないだろうと思い、知り合いの方に呼びかけて、弁当・飲み物持参で乗船料のみ2,000円の体験ツアーを実施した。

●はじめ筑後川河口までの2時間はあつという間

4月10日土曜、快晴。まさに遊覧日和。参加者は家族連れ含めて総勢33名。午前10時40分に西鉄久留米駅東口に集合し、タクシーにて小森野橋の河川敷左岸側に向かった。タクシーの運転手も、この辺の河川敷に行ったことがないらしく「どこから降りられるのかな……」と頼りない。やはり船着き場まで安心して行ける公共交通機関を先ず整備しないと、この遊覧事業は上手くいかないと実感する。

小森野橋の近くの堤防の上から、今回、予約している屋形船を見つけ、一安心。昨日、確認の電話をしていたが、もし来ていなければ32回頭を下げなくてはならない。乗船すれば、後は船頭さん任せとなるが、なんとか予定どおりいけそうと思った。船は50人乗りの大型の屋形船で、中は座



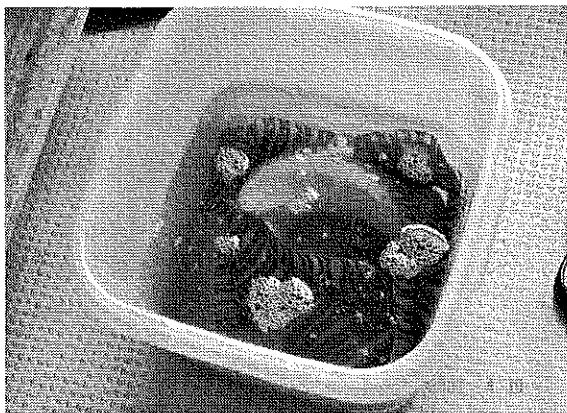
船の操縦、筑後川の解説、ビデオ操作など1人3役で立ち回れる岡村さん

敷となっており、今回の参加者33名全員、寝そべっても十分余裕のあるスペースである。11時過ぎに参加者全員乗船し、いざ有明海へ向けて出航。船頭さんは、大川市でエツ舟を開発し、料亭「おかむら屋」のご主人・岡村さんである。筑後川・有明海で船運航をして50年の経験があり、まさに筑後川・有明海の生き字引みたいな人である。

乗船し、すぐ参加者の皆さんに自己紹介をしていただいた。その自己紹介の合間合間で、岡村さんの筑後川に関する解説を聴き、12時近くになると、みなさん持参のお弁当を食べ始め、また、アルコールもはいり、和気あいあいの雰囲気となつた。

筑後川河川敷の菜の花やゆったりと流れる水面を眺め、美味しいものを食べ、飲みながらの時間は、なかなか乙なものである。また、岡村さんのお話も絶妙であり、退屈しないように干潮時の堰や久留米市にある水天宮（全国水天宮の総本山）の境内の様子などをビデオで見てくれる。

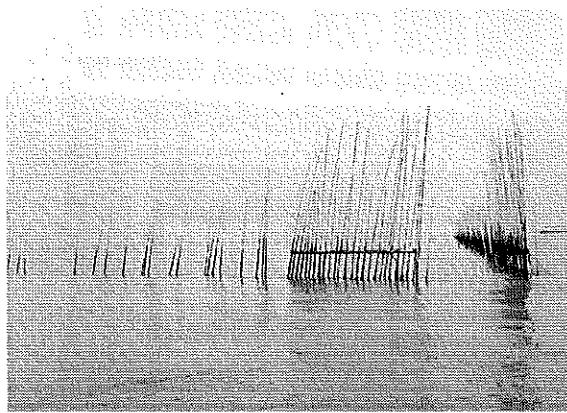
乗船してから1時間たったところで小森野から下流、約4.5kmの地点のある筑後大堰に着いた。ここから先は閘門に入らないと下流域には進めない。この閘門では上流側の扉が降りてきて、上流域の水位と下流域の水位を同じにして下流側の扉を開け、閘門から出る仕掛けとなっている。扉の重さは下流側が約30トン、上流側が約20トンであるため、入って出るまでに約10～15分ぐらいかかるのであるが、迫力もあり、非常に面白かった。岡村さんの話を聴いていると、不思議だと思っていたことが、自然の摺理では当たり前であることに、改めて気づかさせてもらえる。小・中学生が



海老漁をしている漁師さんからクツゾコやシャコをいただく

学校の先生から教室で学ぶより、筑後川・有明海遊覧学習の方が“生きた環境学習”として鮮明に記憶に残るように思う。もっと都会の中学生にも体験させること自体が、物見遊山の観光ではなく、環境学習をテーマとした観光ビジネスにもなると感じた。岡村さんの解説の中で、少し印象に残っていることをご紹介したい。

- ・筑後川河口に近づくと川の水が濁ってくる。これは水質が汚染されているのではなく、満潮になるときに有明海の土砂と一緒に巻き上げてくるためである。有明海に入ると、濁っていた水はいくらかきれいになってくる。
- ・河口に近づくと、漁船やレジャー・ボートが河川敷に停泊しているが、その横には約8~10mはあるうかと思われる棹（昔は竹であったが、今はグラスファイバー製となっている）が船の両側に建てられている。これは約6mの干満の差による横揺れで船が傷まないように上下だけ動くようにするための知恵である。
- ・最近、エツの人気が出てきたものだから有明海までいって食べさせている料理屋もあるらしい。本当にエツが美味しいのは5月~6月の産卵時期に上流に遡上してきて、泥を吐いて身がきれいになった時が一番である。岡村さんは旬の時期以外のエツは決して提供しない。
- ・イイダコのオスは精子をメスに放出し、その後オスがメスに近づくと、メスは敵とみなしてかみ殺すこと。殺した後は、子孫繁栄のための栄養補給をしなくてはならないので、オスを食べてしまう。
- ・有明海の貝は、自ら水質浄化しながら生きている。濁った海水に貝を入れるといっぺんわかる。



魚を追い込んでいく漁法、竹ヒビ漁のしかけ

動植物の世界ではお互いそれぞれの役割があつて、無駄なことはない。

●有明海には延々と海苔畠の棹が連なっている。

予定より少し遅れて1時半頃に待望の有明海へ出た。有明海は想像以上に広い。前方の対岸側（たぶん大村の多良岳か島原半島の雲仙岳）の山々も霞んで見える。有明海に出る前に、岡村さんから海苔養殖をしているエリアを示している地図を見せてもらった。これには町名みたいにエリア毎に番号が付けられており、さらに海苔養殖の権利をもっている漁業者毎のエリアが細かく区切られているらしい。

海苔養殖のための棹が延々と並んでいる風景は、その広さは実感できるが、こればかり見ているとさすがに飽きてくる。途中、海老網をしている漁船に近づき、クツゾコ（正式名称はウシノシタ）とシャコをバケツ1杯分けてもらった。このときには子ども達も喜び、少し盛り上がった。あとは三池の海底炭鉱に空気を送り込むための人工島の三池島、有明海の潮を流れを利用し網をだんだん狭めていく魚を追い込んでいく仕掛け（地元では「竹ヒビ漁」といっている定置網漁）、ムツゴロウが潟から飛び出る様子眺めたりした。この冬眠から醒めたムツゴロウを見るために、引き潮までの時間調整が必要であったこと、また、引き潮の関係で船のスピードが減速されたといった理由で、有明海では3時間の遊覧となってしまった。これは少し長すぎたようで参加者の皆さんも疲れ気味であった。

有明海では、時期や干満の状況に応じて見るポイントを決めておき、1時間程度で済むようにしておく必要があるだろうと感じた。この辺の細や

かなコース設定もこれから課題であろう。

せっかくの機会なので参加していただいた16名の方に、今回の体験遊覧の感想アンケートに答えていただいた。これらの貴重なご意見を参考にし、お客様が喜び、飽きのこないような具体的なコース設定を企画していくかなければならない。

■「面白かった」「魅力的だった」こと

- 筑後大堰（9件）
 - ・船頭さんの話が、自然を大切にする気持ちが良く伝わり、ためになった
 - ・筑後川、有明海の話に詳しく、お話を上手 等
- 有明海の魅力（7件）
 - ・海苔養殖の広大さ
 - ・ムツゴロウを生で見ることができた 等
- 筑後川沿岸のもつ魅力（5件）
 - ・川岸の木や大根の花
 - ・両岸の景色 等
- 遊覧船に乗船していただくための今後の企画や魅力づけ
- 実体験やイベント（12件）
 - ・イイダコ釣りや貝掘り
 - ・ハゼ釣り、潮干狩り、投網漁などの体験
 - ・干潟に降りる、あるいは遊ぶ体験 等
- コース・時間について（6件）
 - ・今回のコース長い、せめて3~3.5時間
 - ・大人向け、子供向けで楽しめる体験企画が必要
 - ・季節毎にテーマを持たせる 等
- 食べ物
 - ・弁当でも、「有明海の海産物」「筑後川流域名産品」にこだわったもの
 - ・有明海の幸を船の中で味わう
 - ・料金別途で良いから船上での料理実演 等
- その他
 - ・筑後川流域の町の特徴や歴史の説明をもっとして欲しい
 - ・船頭さんの解説以外に筑後川まるごと博物館の学芸員などのボランティアの力を借りてもいい
 - ・工程表をイラスト入りで詳しく
 - ・エンジンの音が少し静かなものがあったらよい
 - ・後方では説明の声が聞きづらい、イヤホンなどの工夫が必要 等
- その他気づいたこと
 - ・海に缶やペットボトルなどのゴミが目立った
 - ・廃船が目立った 等

(やまだ たつお)

出雲大社・宗像大社～もっと
観光で稼ぐようなことができないか

山田 龍雄

市町村のまちづくりに係わると「地域づくりの基本として身近な資源を見つめなおし、資源を発掘しよう」と偉そうに言っているのであるが、自

分自身の身近なこととなると本当に知らないことが多い。

2月～3月初めにかけて、出雲大社、宗像大社を訪れる機会があり、改めて両大社の地位や歴史を知ることができた。ちなみに「大社」を広辞苑で紐解くと、『大社とは、古くは社格を大・中・小の3等に分けた第1位の神社、狭義では出雲大社の略』とある。つまり全国津々浦々にある神社の中で、本山にあたる神社である。宗像大社のパンフレットによると『大化の革新によって国郡が布かれると、全国7大社に神郡が設置され、宗像一郡は九州で唯一の神郡として当社の神領に定められた。(中略) 全国で宗像大神を奉斎する神社は、6千余社を数える…』とある。また、宗像大社は、神祖スサノオノミコトと皇祖・天照大神との間に生まれた三姫を祀っており、宗像の地から約55km離れた沖ノ島の沖津宮(おきつぐう)、大島の中津宮(なかつみや)、宗像田島の辺津宮(へきつみや)の三宮をもって宗像大社という。

一方、出雲大社は因幡の白兎の話などで知られる大国主命(おおくにぬしのみこと)を祀っており、659年に創建されたと伝えられている。陰暦の10月、全国では「神無月」というが、出雲地方では全国から神々が集まってくることから「神在月(かみありつき)」と呼ぶ。

●宗像大社の神籬(ひもうぎ)の地は、今でも神々しい雰囲気が漂っている

S A S (Systems Analyst Society) という約33年近く続いている異業種交流会がある。この会では毎年、全国各ブロックの当番制で全国大会を催す。今年はS A S九州が実施することとなっている。この大会では分科会を企画し、通常の観光地ではなく、思い入れのある地域や何かこだわりのある処へ案内するようにしている。今回、その視察コースの一つとして「大島の中津宮～宗像大社(辺津宮)コース」を企画したことから、事前準備として2月下旬にS A Sメンバー8人で視察した。

この視察のメインは、神が降臨するといわれる宗像大社の神籬を見ることがであった。

先に頼んでいた宮司さんの説明を受けながら、最後に宗像大社本殿の南側に位置し、原生林が生い茂る小高い丘を登ると、高宮といわれている神籬を拝見した。ここは、まさに靈験あらたかな霧



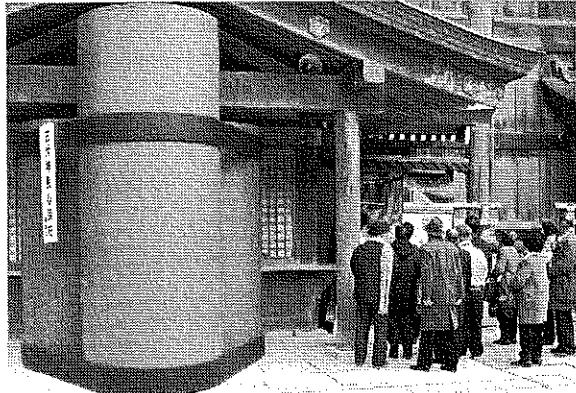
木がうっそうと
茂り、今にも神
様が降りてきそ
うな宗像大社の
神籬

圧気があり、神主さんが儀式をすると周辺の木々を伝わって神が舞い降りてくるような稟とした空気が張りつめている。主観的にはなるが、宗像大社辺津宮（へきみや）で最も価値ある場所は、この神籬ではないだろうか。小生も過去2回ぐらい宗像大社にお参りにきているが、神籬のことは知らなかった。知らなかつたというより、大社 자체も積極的にPRしていない。小生と同じように今まで宗像大社に来ている人でも、この神籬のことを知っている人は少ないのでないだろうか。この神籬をもっとPRし、新たな宗像大社の魅力にできないのであろうかと思う。

この神籬の前での「神前結婚」は、通常のホテルの神前での儀式より厳かな気分となり、ありがたみがあると思う。

●今では寂しい出雲大社の参道

3月始め、出雲大社と松江市の観光産業の状況を確認するため、視察旅行に出かけた。出雲空港からレンタカーを借り、一路出雲大社に向かった。空港から30分ぐらいで大社町に鎮座する出雲大社に着く。大社に併設している駐車場に車を止め、あたりを見回すと超全国区の観光地であるにもかかわらず、駐車場周辺からみえるお店は4～5件しかなく、非常に寂しい。出雲大社本殿から南側に位置する檜鳥居と大鳥居の通りが「神門通り」という、約500mの神社参道がある。ここは営業しているお店や食堂も少なく、空き店舗となっている店もチラホラみられる。翌日の午前中に時間があったので、大社町役場の観光商工振興の担当の人に飛び込みで取材を試みた。担当係自体、観



平成12年に境内から発見された古代本殿の柱のレプリカ

光関連のお店や工場で働いている人数は把握しておらず、根ほり葉ほり聞くと、次のようなことが分かった。

観光関連従業者は、全従業者の5～6%（観光関連のお店32件×3～4人+島根ワイナリー従業者120人／大社町で働いている人4,025人）はありそうだが、出雲大社自体では2.5～3%程度ではないだろうか。観光客が約2,000万人来ている割には観光関連の産業波及効果は小さい。

- ・出雲大社近辺にある蕎麦屋6件、神門通りの蕎麦屋7件、観光旅館12件、民宿3件、ビジネスホテル5件、おみやげ屋5件、島根ワイナリー（従業員120名）。
- ・島根ワイナリーは、昭和60年代始めに株式会社島根ワイナリーとして独立し、現在大社町の觀光拠点施設となっている。
- ・観光客数は出雲大社で2,019万人（平成14年度実績）、日御崎（ひのみさき）1,018万人、ワイナリー1,064万人。ワイナリーと出雲大社の観光客は、ほとんどダブルカウントとなっている。

出雲大社を見たあと、参道の先にある「大社駅」に行ってみた。この駅は、JR山陰線からの支線である大社線の終着駅であり、大正12年に出雲大社参拝客の増加を見込んで建てられたと言われている。この建物は左右対称の和風表現であり、写真から類推すると両翼40～50m、高さ9～10mで待合室の天井も高く、非常に格式の高い造りとなっている。設計は当時神戸鉄道管理局の技術者であった丹羽三男（にわみつお）であり、東京築地本願寺や明治神宮などの設計をした伊藤忠太の助言があったのではないかと言われている。平成2年に大社線廃止に伴い、当駅舎も本来の役割を



出雲大社の玄関口にふさわしい風格のある大社駅

終わったのであるが、現在では地元グループの人たちで、一部を喫茶店として活用している。しかし、この施設であれば、郷土料理を提供するレストランや地域の手づくりの農産品や土産品を出すことで、もっと稼げるような取り組みができるのではないかと思った。ここの喫茶店でコーヒーを飲みながら、運営しているご婦人に、大社線が運行していた時代のことを聞くと「参道は、昭和50年代ごろまで人通りも多く、にぎわっていたが、車社会で列車利用者が減ったこと、また、大社の方でも車社会に併せて自分の敷地内に駐車場を整備したことから、いよいよ寂しい通りになってしましました。」とのこと。

町の方では、もう一度、参道での人通りを増やすための取り組みを検討しているらしいが、どのようなことをしているのか、再度取材してみたいと思う。

●古代本殿の柱跡をもっと観光で活かせないか

出雲大社で最も感動したのが、平安時代まで実際に建造されていた高さ16丈（1丈=10尺、約48m）あったといわれる本殿の柱跡であった。990年頃、源為憲（みなもとのためのり）が著したといわれる教養書「口遊（くちずさみ）」には、『雲太・和二・京三』と記されている。これは当時の大建築物を表すもので、「雲太」は出雲大社本殿が第1位、「和二」は大和（奈良）の東大寺大仏殿で第2位、「京三」は京都大極殿で第3位を示すということであったから、当時、本当に東大寺大仏殿より高かったのであろう。

神殿を支える柱は、直径1.35m柱を3本束ねており、その一部が高さ2.5m程度のレプリカで置かれている。出雲大社宮司家に代々伝わっていた当時の平面図「金輪造営図」というものがあったの

だが、平成12年に柱跡が発見されるまで、当時の建築構造の先生方々は建造は不可能であり、夢幻の話であろうと思われていたものだ。

実際、柱跡の現物を見ると、どのようにして建てたのか、この柱はどこから切り出してきたのかと好奇心がこみ上げる。原木は、出雲地方の南側に位置する三瓶山（さんべさん）付近の縄文杉を使っていたのではないかと言われており、今から1,000年前まで中国地方をはじめ、当時の日本が大木が覆い茂っていた緑深き国であったことがイメージできる。

出雲大社も宗像大社と同じで、あまり維持管理に困っていないのであろうか、このような全国区クラスの資源を活かした観光産業としての取り組みを考えていよいよ感じる。

例えば、昔の出雲大社の高さは、どの程度であったのかを体験するような仕掛けがあつても良いように思った。景観的に問題のない場所を選んで、鉄骨で48mの縁台を造ってみてはどうだろうかと思う。この縁台に昇って、本殿裏側の山々に向かって出雲大社方式の2礼4拍をするのも、清々しい気持ちになれるのではないだろうか。

（やまだ たつお）

食の開発者と消費者の接点を求めて

—食と健康を考えるフォーラム—

山辺 真一

福岡市のアイランドシティのまちづくりの一環として、教育や研究機能の可能性調査を手伝った。そのなかで「環境」と「食」をテーマとしたフォーラムを開催したが、今回は、「食」のフォーラムの報告をしたい。

平成16年3月2日の夕方、食品企業、学生など、参加者30名でフォーラムを開催した。

コーディネーターは、地元のテレビ番組などで活躍している料理研究家の山際千津枝先生にお願いし、食品関連企業3社による企業発表、商品紹介の後、展示食品の試食、交流会を行った。

●食の企業ニーズ「消費者は何を求めているか」

今回のフォーラムは、食品関連企業（製造・卸小売対象）に対するアンケート調査で、商品開発で最も重視するのは「エンドユーザーの志向であ



企業発表の様子



青汁試飲の様子

り、今後の発展のためには「消費者のニーズを直接聞く場が必要」という結果を踏まえて行った。

福岡市の民間従業者約80万人の20%が働く食関連産業にとって、「消費者が何を求めているか」を知ることが大きな課題となっている。

●食と健康の関わりを考える

企業発表をはじめる前に、コーディネーター山際先生は食と健康の関わりの重要性について指摘された。要約すると、

- ・万博以降急速に、日本人の食生活の対応、志向というものが変わり同時に生活の安定は健康への関心を喚起し、健康ブームとなった。
- ・高価な紅茶キノコ、酢大豆、ぶら下がり健康機、ヨーグルトキノコなどなど、色々な健康ブームが現れては消えていった。
- ・今は、科学の発達とともに、食品が担っている色々な特殊成分と人間の健康の関係が明らかになってきている。
- ・色々なテレビ番組、マスコミ関係がその部分的なものに飛びつき、何が何に効くというような非常に短絡的な番組が出来たりもして、食品、食を非常に過大に評価している。何を食べてはいけないと過小に評価している。
- ・今、本当にこの時期、人間と食と健康の関わりを、改めて考えていくことが必要。

●3企業の発表

今回発表をお願いした企業は、乳製品から機能性食品、アレルギー問題など幅広く製品開発に取り組む大牟田市の㈱オーム乳業、体と環境と心に良いものを提供する福岡市のAnnyGroup株式会社、そして、青汁で有名なキューサイ株式会社の3社である。各企業の理念に基づいた商品開発への取り組みを簡単に紹介する。

・オーム乳業

「産学官の共同研究をいろいろな大学、研究機関と連携しながら、機能性食品の開発に取り組んできた。今後は、生活習慣病予防のための商品開発や高齢化社会での免疫機能低下を支える商品開発などへの取り組みを進めたい。また、県内、市内の食品企業が協力、連携していくことが今後は必要。」

・AnnyGroup株式会社

「生活提案趣味雑貨販売を事業として最初に立ち上げた。ただ売るだけではなく、本当に役に立つもの、健康にいいもの、買って良かったと思ってもらえる商品、サービスをこれからも販売したい。そのコンセプトは、本当に体にいいもの、環境にいいもの、心にいいもの、この3つのやさしさを基本としている。いま力を入れているのは、石の癒し（ストーンスパ）である。」

・キューサイ株式会社

「もともと冷凍食品を作っていた会社で、社長が青汁によって健康を回復した。これを他の人にもぜひ紹介したいという動機があり、持っていた冷凍技術を生かし、販売を思いついた。原料確保のために、北海道、島根、広島、九州に圃場を確保し、通年で原料を確保出来る。ただし、この圃場は、全ての畑に番号、周囲に何が植えられているか登録。土づくりでは、作付け前に全て土壤検査する。残留農薬、無機質肥料分、有機質分を検査。無化学肥料栽培を行っている。良い土作りを行っている。また栽培期間中一切農薬を使用しないだけでなく、飛散農薬もだめ。農薬栽培へ厳しいチェックを実施している。」

●企業が消費者と直に交流することが重要

発表会の後、企業製品の紹介、意見交流会を行

った。発表企業だけでなく、他の製品の試食も行ったが、参加した人たちにとっては、試食だけでなく製品の話も聞けたことは好評だった。また、企業の人にとっても、他社の製品の話を直接聞ける、あるいは女性だけでなく男性、若い人、いろいろな人たちの意見を聞けるというのが良い、などの意見があった。参加者の感想をいくつかあげると、「消費者の意見はモニターなどで聞くのだが、専門家や業種の違う他の企業さんの意見が聞ける場がいい」（企業役員）、「普通消費者の意見というと、女性が多く男性の意見はあまり反映されていないと思う。男性も参加しやすい会は意味があると感じた。」（企業営業）

「食と健康」というテーマは、今や、企業人だけでなく、市民、消費者、若い人たちも含めて、多くの人たちの関心事になっており、今後もこういう交流の場が続けられると良いと思った。

（やまべ しんいち）

既存の施設を活用したユニットケアと地域のボランティアに支えられるアウトデイサービス ～大分県中津市「いづみの園～

愛甲 美帆

ネットワークでお話したが、昨年当社では福岡市老人福祉施設協議会の介護費用適正化事業の一貫で、昨年12月に大分県中津市にある介護高齢老人福祉施設「いづみの園」にワーキングメンバーとともに視察に行ってきました。

既存施設を活用したユニットケアと入所者が地域にある民家で昼間過ごすアウトデイ（逆デイサービス）の取り組みを紹介したい。

●施設の概要

「いづみの園」がある大分県中津市は県西北端の福岡県と県境に位置しており、人口67,000人、高齢化率20.4%の街である。「いづみの園」は市中心部から車で約15分ほどの場所にあり、1978年に特別養護老人ホームを開所して以来、在宅介護支援センター、グループホーム、クリニック、障害者生活支援センター、ケアマンションなど高齢者や障害者の生活を支える幅広いサービスを実施している。敷地内には、一般の人も利用できるかわいいカフェレストランが併設されている。

●ユニットケアの取り組みのきっかけ

当日は、介護課長の雪村さん、研修課の森さんを中心に説明をしていただいた。

- ・取り組みの発端は、平成9年経営陣により示された3つのサービスコンセプト、アメニティ（快適サービス）、ヒューマニティ（人間中心）、ローカリティ（地域密着）と「職員の意識改革」や「アメニティサービスの実現」、「サービスの質の確保」など、5項目の施設改革3カ年戦略による。
- ・「ケア研究会」という勉強会が立ち上がり、3大介護といわれる食事、入浴、排泄について半年ずつかけて改善が行われた。事務職員は「臭う」と言っても介護職員は慣れて麻痺していた。施設臭つまり排泄臭を取り除くことから始めた。カーテンを変え、その新しいカーテンに臭いがつかないようにするために排泄ケアをどうしていくか話し合っていった。
- ・研究会に取り組んでいくうちに、職員の意識が変わっていき、「入所者をひとりの生活者としてとらえ、その生活を支えるためにどうしたらよいか」となり、職員から一人ひとりを大切にするために、少人数制でケアをしたいという意見が挙がってきた。そこで、ケアの質の向上させるための手段として、平成13年にユニットケアを導入した。

●既存のハードを工夫したユニットケア

新規に建設する新型特別養護老人ホームでは、全室個室で10名以内を1ユニットとする。しかしいづみの園では、片廊下の建物であるため全室個室にはできない。当初は110名の入所者を6つのユニット、約10名から20名にわけ、スタッフ4~5名を固定の担当とするなど、集団ケアの一部分は残しながらの取り組みだった。

ユニットごとのリビングは、寮母室をリビングに変えたり、廊下をパーティションで区切りカーペットを敷く、のれんをかけるなどの工夫でそのスペースを確保している。以前は20名が集まって一齐に食事をしていたという食堂は、現在リビングと会議室になっていた。

食事については、おかげは一括でつくり、ご飯と汁物は各ユニットで職員と入所者でつくる。その台所は、手洗い場の一部を流しに変えたキッチンの横にカセットコンロ置くという本当に最小限



廊下をパーティションで区切ってリビングに

のリフォームで確保している。

この取り組みにより、レクリエーションだけでなく、食事を共につくるなどの「生活」への参加が本人の意欲を生み、今まで考えられなかつたいきいきとした表情がでてきた。

また、スタッフとなじみの関係を大事に、本人に寄り添うケアをされているが、ケアの見直しをする前は職員が座って入所者と食事を共にするなんて考えられなかつたそうである。

入所者だけでなく面会に来る家族との関係においても良い効果があつた。スタッフが固定しているので普段の様子について家族が担当者に直接聞くことができる。スタッフは家族と接することでその質問に答えられなくてはいけないし、家族の思いを聞くことで本人のケアの方法をより考えられるようになった。

●誰がみても入所者の状況が一目でわかる一覧表、

ライフサポートを作成

いづみの園では、個人のケアプランを補うものとして移動、静養、排泄、食事介助などの項目に関して、入所者が朝起きたときから本人の1日の動きを把握し24時間いつどのようなケアをしたらよいかその流れが一目みてわかるような一覧表「ライフサポート」が作成され、毎月更新されている。作成するのは最初は大変だが、情報を全員で共有でき、夜勤（2ユニットを2人で担当）や人事異動があつても、入所者に必要な身体介護や本人の体調の変化がわかるようになるそうだ。

●ボランティアに支えられるアウトデイの取り組み

ユニットケアに取り組むなかで、もっとハードが家庭的になれば、お年寄りは変わるものではないかという思いが出て、入所者の生活の楽しみを広げるため、施設から車で15分程度の場所にある民



寮母室がリビングへ

家を借りてアウトデイサービスを始めた。

この家は入所者の自宅で、空き家になっており、道路拡張工事に伴い平成15年12月に取り壊しが決まっていたが、それまでは家賃は無料、水道光熱費は施設の支払いという契約で利用された。

アウトデイには、「施設よりも家庭の雰囲気の方が良さそうな人」「混乱がなく落ち着いている人」を選んで実施した。決まったメンバーで1日5名、週3～4回通う。

<1日のスケジュール>

10:00	車に乗り、お昼のおかず決め、買い物
11:00	家に到着。こたつでお茶を飲んだり、一息ついで昼ご飯を作る。
14:00頃まで	ゆっくり食事、思い思いに過ごし
16:00頃出発、菊花展などあれば見に行き	
16:30頃施設に帰ってくる	

当初から地域を巻き込みたいと考えていたので、その家でどういう人が暮らしていたのか知っている人、歩きや自転車で来られる隣近所の範囲の人でボランティアを募集したところ6人が集まつた。ボランティアの方は、皆が到着する前に来て部屋を暖めてくれている。雪の日でも職員より早く来てくれるほど熱心な方達だそうだ。

はじめは、ボランティア2人と職員2人で1日みていたが、慣れてきた今ではボランティア2人と職員1人で対応している。

ボランティアの方には、お年寄りとの接し方にについてまず、「とにかく見守ってください」とお願いしたそうだ。

ボランティアの方には1日のうち食事介助などスポット的に能力が必要な時間に対して時給800円が支払われている。

この家は12月に取り壊しが決まっていたが、新聞にこの取り組みが特集されたところ、「自宅を使ってもいいですよ」という申し出があった。その方は1人暮らしで「週3日間人工透析のため家をあけるので、その間いつ来ても構わない」ということだった。今後は、そこでアウトデイを実施していく予定だそうだ。

アウトデイができる家の条件は、「庭は有る方がよい」「トイレは洋式」「段差はない方がよい」「地域の人が『あれ?ここ何だろう』と目につくところがよい」「外に出ていく場合があるので車の通りに注意する(その分リスクが高い)。」ということだった。

今回場所を変えるにあたっても隣近所にボランティアの募集をかけたそうだ。ボランティアに奥様が関わっていると、アウトデイの場所に漬物をもってだんなさんが来たりする。「施設に入っている人が特別ではない、施設も地域ケアの1つ」という意識で、隣近所との交流を当たり前のように、施設も出ていって地域との関係づくりをされている。

お年寄りの変化もあった。ユニットケアでは、頼んでもなかなか動かなかった人が、アウトデイでは「酢の物の味付けお願ひしていいですか」と言えば「はい」といって手伝ってくれるそうだ。アウトデイから帰ってきて、「今日はどこへ行って来たの?」と聞くと「どこもいっていない。」と言われることもあるそうだが・・・。

ハードとして普通の家の持つ力、雰囲気は大きいと言われていた。

●現場の意識を変えるマネジメント

雪村さんは、これらの取り組みの背景には、職員の意識改革、これから経営理念をはっきりと打ち出し、それを実現するためにはどうしたらよいかと議論し、実践してきた4年間の積み重ねがあったからだったと言っておられた。

特に介護全体をみる課長の雪村さんが研究グループメンバーの構成を工夫し、スタッフに常に問いかけ、本人が考えるようなアドバイスをするという、現場を引っ張るマネジメント力が鍵をにぎっているように思った。

施設としても、昨年6月から職員の人事考課制度を取り入れられ、より一層職員の意識が高まる仕組みづくりを検討してあるようだ。

視察したメンバーの感想は「理念を掲げてそれに向かって実行するという組織のマネジメントの重要性に改めて気づいた」「アウトデイの取り組みやボランティアの活用について地域性が大きく関わっていると思うが、コストだけに偏らないサービスも大事だ。今後取り組んでいく必要性を感じた」という声が挙がっていた。

ハードもちろん大事だが、「そのハードを活かしてどんなことがしたいのか。どうありたいのか」という議論を積み重ねて、実践していくことの大切さを学んだ視察であった。

(あいこう みほ)

所員近況

輪車イスで山登り。

行けるところまで行ってみよう!

春の日差しが気持ち良い天気に恵まれた4月11日、福岡市東部、新宮町などにまたがる立花山に「障害者の自立を考える根っこ会」のメンバーで登山に行ってきました。

「根っこ会」の活動は、昨年5月からはじめました。3年前「新宮町おでかけマップ」という町内の公共的な建物や民間のスーパー・飲食店の入口の段差やスロープの有無、トイレの使いやすさなどを調査してまとめた地図づくり(よかネット53号で紹介)に関わった人やその友人などが参加しています。

そろそろマップの更新が必要だということや新宮町に住む障害者同士「自分の住む町をもっと住みやすくしよう、日頃思っていることを皆でおしゃべりするサロンのような集まりが欲しいね」という話が持ち上がりました。ひと月に1回集まっ



甘酒を飲んでさあ出発



一度脇にはると脱出に力がいります

て、障害者支援費制度の勉強や日頃の生活で困ったことなどをまとめ、町内のお店にスロープ設置の要望をしたり、町と話し合いの場をもったりしています。

町内では、昨年4月からコミュニティバスが運行されており、マップ更新の準備や新しく利用できる場所の発見も兼ねて外にでかけ、車イスや足が悪い人が段差などにスロープがあればスムーズに利用できることを知ってもらおうとなり、昨年10月には、相島にハイキングに行きました。

相島は新宮湊から船で10～15分の島ですが、下肢障害や車イスでは船に乗りにくいので町内といえどもメンバーのほとんどが行ったことがあります。当日は町内の障害児の会の親子も参加し、メンバーIさんのだんなさんのお手製折り畳み式スロープのおかげでスムーズに乗船することができました。島内を散策し、相島から本島を見る景色を楽しんだので「よおし。今度は春に立花山へ」ということで今回の登山が決まりました。

当日は、車で登山口まで行き、まずは登山道入口を目指しました。麓斜面には農家の大きな家々が構えているのですが、道は車1台がぎりぎり通れるほど細く、早速、急な坂道。車が通る度に「車ですよ～」と列の一一番後ろにいた私は声を上げていました。冬の間ほとんど体を動かしてなかつた私に、大丈夫だろうか…という不安がよぎりかけた時、目に飛びこんできたのは『祝立花山開き』の横断幕の下、先に着いていたメンバーが甘酒を飲んでいたり、法被姿の人に囲まれている様子。遅れてきた私にも、気づいた係の人が「はいどうぞ～」と甘酒、甘夏、町内にあるパン工場のパンを手渡してくれました。ひとしきり皆さんのお歓待を受けたり、記念写真をとった後「よ



皆で輪になってお弁当を食べました

し、再度出発」と車イスを見ると、後ろの荷物かごには今もらったものが全員分ぎっしり詰め込まれていました……。

さて、ここからが本番です。先ほども急だったので、さらに道は、急になって行きます。平坦な道ならばスイスイと進む電動車イスですが、斜面では、小さな溝にスピルしたり、車が安定しないので後ろから人が支え、最後の方は押し上げるように登って行きました。やっと広場が見えてきたそこは山頂まで1000m地点。これからがいよいよ山道という地点ですが、アスファルト舗装もここまで。山道を行くのは厳しく今回はこの広場でお弁当を広げることにしました（後でみた、パンフレットには「ここまで登りの方が以外ときついかも」と書いてあり、納得しました）。

私たちがお弁当を食べている横を、これから登る方、山頂まで行って下山してきた方が行き交います。挨拶をする中で「おお、ようここまで登ってきたね」と驚かれたり「〇〇山だったら、山頂近くまで車でも行ける道があるよ。あそこは景色もいいし」と教えてくれる人もいました。

外で食べるお弁当のおいしさに早くも「次回は何をする？どこに行こうかあ」という話で盛り上がりいました。「海は？」「夏はやっぱりバーベキューでしょ。」「家に、バーベキュー用のドラム缶があったかも！？」

秋に使った渡船場に身障者用トイレができたという情報もあり、次回のレクリエーションは海が第一候補になりそうです。

(愛甲 美帆)

新人紹介

■私の「まちづくり」へのスタートライン

私は27歳、しかし大学院新卒である。その原因は、18歳からコンビニやドカタ、時には山伏等等と、常に3つ以上のアルバイトを掛け持ち、肝心の勉強のほうは・・・という浪人・大学生活を送って来たためである。しかしこのような学生生活を送るなかで、私の進路に強い影響を与えたアルバイトがあった。それは天神の某FMラジオ局で九州出身、または九州で活動している小さなグループやバンドを紹介するという番組に携わらせてもらったことである。

それを始めたきっかけは以前その番組を担当していた知人の紹介であった。幼いときから私は人並み以上の音楽好きで、小遣いはほとんどCD、レコードに費やしていた。それに加え、性格が明るいという、ただそれだけの理由でラジオ番組の制作兼司会を任され、私も最初はただおもしろそうだなという軽い気持ちで参加した。番組は木曜日の夕方、一時間持たせていただいたのだが、そこは小さなラジオ局で、私は話し下手、さらにあまり有名でない(?)バンド・ミュージシャン達ばかり紹介していたためか、反響はごくごく小さなものであった。しかし、たまには「この番組を通じて九州を盛り上げてほしい」「全国で売れていないなくても、九州に良い音楽は多いことを知った」といった嬉しい声も聞くことができた。そういう声はラジオ活動の「九州の音楽を紹介し、また盛り上げていく」という意味を考えさせてくれ、やりがいを与えてくれるとともに、九州各地の音楽家のものへ(たまには全身イレズミの強面ロッカーの所へも)取材に行く意欲を駆り立ててくれた。取材の場で感じたのは、九州で活動されている音楽家の方たちは強面さんや、度派手なミュージシャンの方などでも、みな生まれ育った九州が大好きだということである。「九州は熱いっちゃんけん」という言葉をよく耳にした。そういう方々と出会ってエネルギーをもらい、リスナーの方々からの期待と応援の声に支えられ、4年間番組を続けることが出来た。

そしてこの番組を続けるうちに、私は「九州を

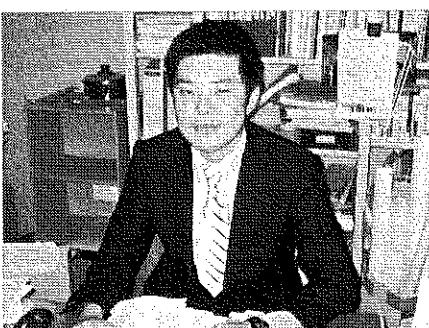
もっと元気にしたい」という、具体的ではないが強いあこがれを持つようになった。それは、自分も九州のことが大好きだからということに加え、このラジオ活動を通じて九州の音楽を紹介し、九州を盛り上げることに少しはお役に立てたのではないか?という(勘違いに似ているが)非常に大きなよろこびを得ることが出来たからである。

「九州を元気にする」ための手段は音楽活動であったり食であったり、人によっていろいろあるだろうが、私は都市計画で実現したいと考えるようになった。それは当時私が建築学科の学生で都市計画に興味をもっており、九州のまちづくりに関わることで、そのあこがれを実現することができるかもしれないと考えるようになったからである。

今の私はまだ九州のまちに対する知識もないし、ましてプランを立てたこともない。しかしこれからラジオ活動で抱いたあこがれを現実のものとするために、まちづくりに対する自分なりの考えを創っていきたいと考えている。

皆様これからよろしくお願ひします。

(原 啓介)



まだまだ味
覚が未熟な
ので鍛えな
ければと思
っています。

■課外授業Ⅰ(水商売編)

酒が大好きな私は、友人と鹿児島の夜の盛り場「天文館」にくりだし、芋焼酎を飲んで深夜まで語るという本業そっちのけの学生生活を送っていました。そうしているうちに、ショットバーのバイトの空きがでたという情報をキャッチ、実をいうと内気な性格だった私は、人前が苦手な性格を克服するいいチャンスだと思い、働くことにしました。2年間という短い間ではありましたが、水商売を通して接客業を経験することができ、大変めになつたと思っています。

私の勤めていた店は、マスターと私の二人きりで、お客様は水商売のプロが多く、仕事帰りに

自分のお店の客と一杯飲むようなお店です。そこで仕事は、ドリンクを作りつつお客様と話すことでした。お客様への心配り・気配り、何の話をするか、どう会話を展開するかなど、どれをとっても最初は上手くできず、その横でお客様を楽しませるマスターにものすごく憧れました。マスターの知識・経験の多さと、自分の知らない分野の話をふられた時に、違った切り口から話を広げる頭の回転の速さ、相手を楽しませる会話のリズムなど、その時のその人にあった接客をさり気なくこなすところに、魅せられました。

私は、最初、お客様の名前を片端から覚えることから始めました。次に来たときに名前で呼ぶと、「覚えていてくれてたの！？」と一気に距離が縮まり、親しみがわき、話もしやすくなるからです。名前やこれまで来たときに話した会話の内容を覚え、心配り・気配りも少しは身についてくると、お客様から飲み物を頂いたり、お土産を頂いたりと随分可愛がって頂きました。しかし、私は、お客様との会話の面では、一回りも二回りも年の上のお客さんが喜んで聞いてくれるような知識・経験が少なく、お客様を満足させられるような会話をすることが出来ずに、大変苦戦しました。こんな経験を通して、人を相手とした仕事をするにあたって、知識不足・経験不足では生き残れないということを痛感しました。

入社して1ヶ月足らず、まだ知識も経験も少ない私ですが、この仕事をやっていくにあたり、心配り・気配りを大切にし、お客様が喜んでくれるような仕事ができるように努めています。型にとらわれることなく、情報をたくさん吸収して、それを必要としている人やまちに発信していくたいと思います。

応援どうぞよろしくお願いします。

(雪丸 久徳)



このときは
くたびれて
いた。



『あるのかないのか？

日本人の創造性』

講談社

飯沼和正



『高峰譲吉の生涯』

朝日新聞社

飯沼和正・菅野富夫

アドレナリンというホルモンを最初に発見したのは高峰という日本人だったことを知っていますか？またその彼が日本のベンチャービジネスの草分け的な存在であったことを知っていますか？

恥ずかしながら私はこの2冊の本を読むまで、全く知らなかった。そもそもこれらの本に出会ったのは、ある仕事の中で、インキュベート施設や相談窓口といったベンチャーサポートはやたら増えているのに、肝心のビジネスがそれほど生まれてこないのはどうしてだろうかを考えていたときだった。

社会のシステム的な問題は置いておいて、まず自分がどうしたらベンチャービジネスを興せるのかを考えてみた。ベンチャー起業に必要な要素としては、当たり前のことだが、

- ①社会にとって新しい価値を創造すること
 - ②新規に事業を興すこと
 - ③サービスや商品の提供を継続すること
- というような3つの段階があるようだ。
- ②の事業を興すためのモチベーションやリスクを負う力や③の事業を続けていくための経営能力などは、自分はまだまだ身につけていないと感じるのだが、一番の問題は①の創造性を持っていないことではないかと感じた。

他の2つの要素は、①のアイディアやビジネスコンセプトに共感する人が現れれば、相談に乗ってもらったり、他人に任せることもできる。しかし①だけは、どうしても自分の創造性によるものである。

はたして自分には創造性がないのだろうか、そ

そもそも創造性とはなんなのだろうか、それを考えさせてくれたのがこれらの本だった。「日本人の創造性」では“日本人は創造性に乏しいか”という設問を、明治の科学者たち（北里柴三郎、高峰譲吉、長岡半太郎、池田菊苗、夏目漱石、鈴木梅太郎）の業績を踏まえた上で、問い合わせている。その中で出てくるのが高峰譲吉である。彼は高級官僚にもかかわらず、防腐剤のない時代に、日本酒の腐敗を防ぐために酒樽の中の雑菌を取り除く方法を考案して会社をつくり、農業の生産性を高めるために、肥やしから人造肥料を普及させようと、訪米中に自費で何トンものリン酸肥料やその原料を買って持ち帰り、経済界の要人を口説いて人造肥料の会社を設立したりする（当時の農商務省を退職）。また、日本酒の麹の技術をウイスキーの製造に応用すれば、生産効率も費用も格段によくなるのではないかと提案を行い、渡米して小さな研究開発会社をつくり、ウイスキー会社と共同開発を行うなど、実に創造的な仕事を行つ



『次の生き方』

平凡社
森孝之

最近様々な種類の小型のペットボトルを見かけるが、今まで私は、ペットボトルに書いてあるリサイクルという言葉の意味を、繰り返し何度も利用するものと勘違いしていた。しかし、ゴミにならずに循環するリサイクルとは異なり、いずれゴミになるダウソサイクルということを本書で初めて知った。私は最近引っ越しを済ませたばかりであるが、そのとき10袋くらいのゴミを捨てた。多少古くなっているものではあったが、なかにはまだ使えるモノも数多くあったと思う。買い換えれば済むという気持ちと自分一人ぐらいう環境への問題意識の低さに私は反省した。

この本の著者は、環境問題を真剣に捉え、「エコライフガーデン」（循環型の庭）という1000坪の庭を作り生活している。20歳の時からこの庭を作り始め、現在に至るまでの40数年間、この庭をつくり続けており、現在、約200種類1000本の木

ている。アドレナリンの発見も大学の研究室などではなく、そうした自分でつくった小さな会社の中で発見したものだった。

団塊ジュニア世代である私は、パソコンの普及台数が100万台を超えて、ファミコンがブームになる1985年ごろに少年時代を過ごし、小さなころからテレビやゲームに当たり前のように接してきた。そのため、「自分で考える。問題を意識する。」といったことをしてこなかった。それでは創造性がないのは当たり前である。高峰の仕事を知って、社会に対して問題意識を持って、いつも考えていることが創造性に大きく影響していると、ようやく感じるようになった。その問題意識の上に、新しいアイディアを創造するというステップがあると思うのだが、まずは社会の問題を意識し、考えるといった“くせ”を身につける訓練から始めないといけないようである。

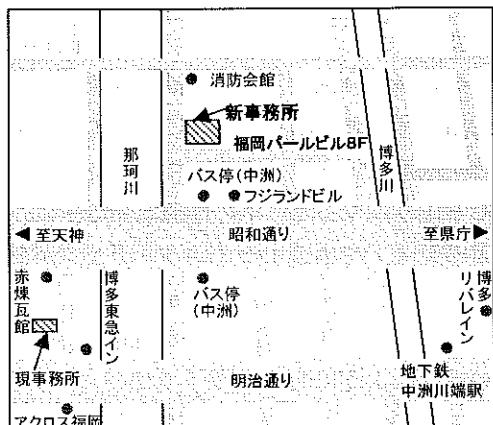
（本田 正明）

が茂っているそうだ。私はまず、この1000坪という庭の広さに驚かされたが、同時に大変そう、面倒くさそうと感じた。身近に自然を感じながらの生活には凄く憧れるが、そこでの生活は、糞尿を有機肥料に使い、のこり湯は「水やり」に使うという、いかにも面倒くさそうな暮らしなので、今の私には、到底できそうにない。現在の便利な社会で、著者のような生き方ができる人はめったにいないと思う。自分の中の問題意識をあやふやにすることなくはっきりと持ち続け、改善に向けて実際に行動している点でこの人は凄いと思う。著者はこの本の中で、「これから先、如何にして我々人間が豊かな生活を送りつづけていくか」「環境への負荷を小さくする循環型社会」「生活の質のあり方」等についての考え方を具体的な事例を取り入れながら記している。著者の視点は広く、世界レベルの話など、読み進める度に初めて知るようなことばかりである。残念ながら、私は、本書の魅力を上手に伝えることができないが、是非とも一度読まれることを薦めたい。環境問題を基に自分の将来の生き方・本当の豊かさとは何かを考えさせられると思う。私にとっては、何よりも問題意識を強くもつという部分が欠けていることを知る良いきっかけとなった。（雪丸 久徳）

●第12回よかネットパーティー開催のお知らせ

人と人との交流の輪づくり “ひともうけ” の会「よかネットパーティー」を今年も行います。いつものように皆様の「ひとつこと・ひとあじ」を持ち寄る参加型パーティーです。

なお今年は新事務所のお披露目と、移転のご挨拶を兼ねておりますので、4日（金）、5日（土）の二日間にわたって開催します。皆様のご参加をお待ちいたしております。



日時：平成16年6月4日（金）18:00～20:00
5日（土）13:00～15:30

場所：（株）よかネット新事務所（左図）
福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

連絡先：TEL: 092-731-7671
FAX: 092-761-7673 (担当: 愛甲 佐伯)
(※事務所移転のため、この電話番号は6月17日まで
となっております。)

●事務所移転のお知らせ

6月21日（月）に事務所を移転いたします。移転先は、上図のとおりとなっております。なお、6月18（金）、19（土）、20（日）の3日間は、事務所引越しのため、休業いたします。

住所：〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

連絡先：TEL: 092-283-2121 FAX: 092-283-2128
(※6月21日から、この電話番号に変更となります。)

編集後記

糸島のまちづくりなんでも相談会も気が付けば5回目。よかネット67号でも紹介した稻留の火山で、“山に竹が増えるのを元から防ごう”とタケノコ掘りを開催しました。せっかくなので、いつも来る人以外にも声をかけ合ったところ、なんと60名を越える参加者が集まりました。タケノコ掘り初体験の人、この日のために高菜漬けを準備された地元農家、はたまた会の趣旨を知らずにタケノコにつられて来ている人もいましたが、それはそれでいいのでは、という雰囲気が会にはあります。都市と農村の人の新しいつき合いの場になってきたようで、お世話係としてはうれしいかぎりです。（ほ）

よかネット No. 69 2004. 5

（編集・発行）

よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

<http://www.yokanet.com>

mail: info@yokanet.com

（ネットワーク会社）

よか地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-5231

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

よか地域計画・名古屋